90年代の情報産業の動向と当社の対応

富士通㈱代表取締役社長　**関澤　義**

21世紀まであと10年足らずとなった．「20世紀後半に端を発した『情報革命』が100年の大台で進展している」という説があるが，それによると現在はその中盤となる90年代ということになる．

本稿では，この90年代における「情報産業の動向」と，その中において私が考えている「富士通の事業展開のポイント」を述べたい．

90年代の情報産業の動向

今「情報産業」の中身は激しく変化している．10年前はハードウェアを供給する製造業が中心であったが，80年代のうちにハードウェアの相対的なウェイトは減りソフトウェアやサービスが増えてきた．サービスの中身も情報処理や情報通信を統合したVANのようなものが増えている．またお客様の情報システムを構築するためのコンサルテーションから始まって，企画・設計・製造・試験・保守さらには機能拡張・運用までを含むサービスも「情報産業」の重要な部分になってきた．

この傾向は90年代にもますます進展していくであろう．ハードウェアの量的成長が80年代よりも緩慢になっても，このような「ソフト的」な部分の急成長がこれを補い，「情報産業」全体としては引き続き2桁成長を維持すると思われる．

この「情報産業」の構造変化は，いろいろな変化の原動力になる．たとえば，ベンダ（供給者）には，その事業のソフト化・サービス化を促す．これに応じきれないベンダは相対的な地位を落とすことになる．また，お客様の必要とするシステムやサービスを的確に提供できないベンダは，いかにそのハードウェアが優れていても苦しい状況になるであろう．

一方「情報産業」以外の分野からの参入がますます増えるだろう．ハードウェアをいわゆるプラットフォームと認識して適当なベンダから調達し，その上に差別化したソフトウェアやサービスを上位構造として載せる新規事業がその好例である．

いずれにしても，「情報産業」はますます多様化し，裾野も広がり，同時に最先端の分野では一段と競争が激化する．何から何まですべてをカバーする企業の存在は難しくなる一方，限られた用途に特化したシステムで生きる企業は増えるであろう．

富士通の事業展開のポイント

このような90年代にあって，富士通は従来のお客様の情報システム資産を引き続きサポートし続けるとともにお客様の90年代の事業展開に必要な情報システムを見分け，それを実現するために「情報技術」と「サービス」両面でお応えしていきたい．

コンピュータやネットワークに代表される「情報技術」の役割を，私は「人間の情報に関わる活動を支援したり代行すること」であると考えている．その結果「人間の活動が従来より迅速かつ正確に行なえたり感性豊かになる」といった効果が得られると思う．

こういった「情報技術」への当社の取組みについて，まず情報産業で最近話題になっている「ダウンサイジング化」，「ネットワーク化」，「マルチメディア化」，「オープン化」という4つの技術的観点で紹介し，最後に「サービス化」という事業的観点で以下に紹介する．

★ダウンサイジング化

これは今一番注目を浴びている現象である．半導体の進歩により「従来は大型コンピュータを使っていた業務がパソコンやワークステーションを主体にした方法で実現できる」ということを一般的に指している．確かにハードウェアだけの価格の面では，同じ業務を情報化するのに数分の一になることも珍しくなくなってきた．しかしながら「価格が安いから」という理由で「メインフレ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

ームの業務をすべてパソコンにシフトさせていく」といった短絡したやり方は成立しない．特に企業の基幹業務では，一元化されたデータベースを管理する高速・高信頼なメインフレームと高付加価値なネットワークをバックに，情報を必要とする人の前に使いやすいワークステーションやパソコンを配置した適材適所の情報システムが必須となろう．

こういう中で富士通としては，「しかるべきところに本来のコンピュータを置いて業務に最適な情報システムを実現する」という「ライトサイジング(Right-Sizing)」の発想で製品開発をしている．具体的には，ノートパソコンの軽量化・低価格化を図り，これにより企業の営業マンがこれを持参して顧客先でのサービスや営業効率の向上を目指したシステムなどが好例である．またオフィスでは1人に1台のワークステーションを割当てた上で強力なパワーの部門サーバを設置し，部門データベース管理やプリント出力を行なう．そして全社的な情報が必要な場合にメインフレームのデータベースをアクセスするといった「企業構造や作業方法を素直に反映した情報システム形態」を可能にしていきたい．

★ネットワーク化

90年代の前半は現在のＩＳＤＮの進展により，経済的かつ高付加価値なネットワークがさらに拡大する．また携帯電話や無線パソコンといった移動体情報システムの登場で企業外の活動の効率化が進むだろう．またパソコン通信の活用により無店舗販売システムの構築が容易かつ効果的になり，企業の「新規事業の創出」等に威力を発揮する．

90年代後半になると，現在のＩＳＤＮの100倍以上も高速な広帯域ＩＳＤＮの登場により，世界的規模のネットワーキングがマルチメディアを含めて可能になり，企業の情報活用力の差がますます大きくなると思われる．そういった時代に先駆けて，通信の大手でもある当社としては，光通信システムや広帯域交換機等のネットワークインフラについてはもちろん，その上でのアプリケーションまで含めて多面的に研究・開発していきたい．

★マルチメディア化

「マルチメディア化」とは，現在の情報システムで扱っている大半のデータが数値や文字で表現されているのに加えてグラフ，イメージ，画像，映像，さらには音声等を自由に組み合わせて感性豊かな情報システムを実現することを言う．

当社はすでに「マルチメディアパソコンＦＭＴＯＷＮＳ」により，家庭・教育・娯楽といった分野でマルチメディアの世界を着実に拓いてきたと自負している．今後は一般ビジネス分野においても広くマルチメディア化を進めたい．これにより企業内の情報システムの使いやすさの向上，一層の普及に貢献したい．さらには，顧客サービスにおいて「ビジュアルなプレゼンテーションに思わず買いたくなる」とか「ネットワークに接続された電子カタログを見ながら消費者が自分で注文を出す」といった戦略的な情報システムが構築できるよう支援していきたい．

★オープン化

以上のダウンサイジング化，ネットワーク化，さらにはマルチメディア化のいずれも真にユーザーの役に立つような活用をされるためには「オープン化」が大前提になる．そのために，ＵＮＩＸに代表される「ソフトウェアの可搬性」，OSI (Open Systems Interconnection) に代表される「プロセッサ間の接続性」，GUI(Graphical User Interface) に代表される「人間の操作性」といった切り口で「どこでも誰でも誰とでも好きなように」情報システムが活用できる環境の整備を進めていきたい．これにより，「情報システム資産の流通性」ばかりでなく，社会的・世界的規模での「人間の流通性」を向上させ，「人の知的生産性の向上」による企業活動の活性化やグローバル化の推進に貢献していきたい．

★サービス化

「サービス」については，お客様の情報システムの実現のために「どのような情報システムを構築するか」といったコンサルテーションをはじめ，システムエンジニアリング支援やハードウェア・ソフトウェアの保守等製品まわりの各種サービスを引き続き充実させていきたい．さらに情報システム構築にあたっての多様な要望に対して，個々の「製品」や「サービス」をインテグレートし，最適な「ソリューション」を提供する「トータルサービス」を事業の柱にし，「サービス業」としてのウェイトを高めていく所存である．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．